



館長だより

山形県産業科学館

令和8年1月9日(金)

発行 館長 加藤智一

熊野信仰I ー「三」と「八」が意味するもの

みなさんは初詣に行かれましたか？私、今年は南陽市宮内の熊野大社に行ってまいりました。南陽市宮内の熊野大社の公式説明では、和歌山の熊野本宮大社、長野県軽井沢の熊野皇大神社、そして南陽市宮内の熊野大社の三社を「日本三熊野」と呼ぶと紹介されています。そもそも熊野信仰とは、熊野三山（本宮・速玉・那智）を中心に展開した神仏習合の信仰で、平安後期から中世にかけて爆発的に広りました。熊野は古代から「神秘の地」とされ、山・滝・岩などの自然そのものを神の依代とする自然神信仰が根底にあります。熊野信仰の柱は以下の三つです。①自然神信仰（原始熊野）（本宮：熊野川、那智：那智の滝、速玉：神倉山のごとびき岩）これら自然物を神の依代とする信仰が起源です。②修驗道との結びつき。熊野は古来、山岳修行の場であり、持経者（法華経を持って山で修行する僧）や修驗者が活動した地であり、苦行を通じて「蘇り」を得る場として理解されるようになりました。③神仏習合（熊野権現）。平安後期、末法思想の広がりとともに、熊野の神々は仏の化身（権現）とされるようになりました（本宮：家都美御子大神＝阿弥陀如来、速玉：速玉男神＝薬師如来、那智：牟須美神＝千手觀音）。またこの「熊野三所権現」は12柱の神々（熊野十二所権現）として体系化されました。そしてこの熊野三山を巡る熊野詣は、平安後期から鎌倉期、大ブームになりました。宇多法皇以来、上皇たちが何度も参詣しています。中でも後白河上皇は34回も参詣したそうです。庶民も大量に訪れ「蟻の熊野詣」と呼ばれるほどでした。熊野は「浄不浄を問わず、誰でも受け入れる」包摂性を持つ聖地で、身分を超えて人々を惹きつけました。

熊野信仰の核心と言るべきテーマは「蘇り」です。熊野は「現世の浄土」とされ、絶望からの再生、病氣平癒、厄除け、来世の救済を求めて人々は訪れました。自然の厳しさと美しさ、修行の苦しさ、神仏習合の救済思想が重なり、熊野は「蘇りの地」として特別な意味を持つようになったのです。そして熊野信仰は全国へ広がりをみせ、約3,000～4,700社の熊野神社が勧請されました。そのネットワークの中に、宮内の熊野大社や長野の熊野皇大神社も含まれるという訳です。

熊野信仰を語るうえで欠かせないのが、神武東征

の際、熊野の山中で道に迷った神武天皇を、天照大神の遣いとして先導したという八咫鳥（やたがらす）の逸話です。この黒い鳥は単なる道案内役ではありません。八咫鳥の姿は、古代東アジアに広がる太陽信仰、数の象徴性、そして「大きいなるもの」を示す意味をも重ね合わされているのです。八咫鳥の最も特徴的な点は、足が三本であることですが、三本足の鳥というモチーフは日本固有のものではなく、中国神話の「三足鳥（さんそくう）」、朝鮮半島の古代壁画に描かれた太陽の鳥など、東アジア全域に広がる共通の象徴体系に属しています。なぜ「三」なのでしょうか。古代において、数は単なる数量ではなく、宇宙の構造を示す象徴でした。特に「三」は、天地人の三才、過去・現在・未来の三時、あるいは朝・昼・夜の三相など、世界を成り立てる基本的な枠組みを表す数として扱われてきました。太陽はその中心に位置する存在であり、世界を照らし、時間を刻み、生命を育む力を持ちます。ゆえに、太陽を象徴する鳥が「三本足」で描かれるのは、太陽が世界の三相を統べる存在であるという思想の視覚化だと考えられるのです。また、八咫鳥の「八咫（やた）」とは、単に「八つの咫（あた）」という長さの単位を指すだけではありません。古代日本語において「八」は「多い」「大きい」「広い」といった意味を持つ数詞であり、「咫」は手を広げたときの親指から中指までの長さを示します。つまり「八咫」とは、「非常に大きく広がったもの」「人の尺度を超えた広がり」を象徴する言葉でもあるのです。他にも、八咫鏡（やたのかがみ）、八咫の剣など、神話に登場する「八咫」は、いずれも神の領域に属するスケールを示します。人間の手のひらで測れるはずの「咫」が、八倍にも広がると、その表現は、神の力が人間の尺度を超えていることを暗示しているのです。

「正しい方向へ導く」という八咫鳥の象徴性にあやかって、今年一年が、みなさんにとりまして発展的な年になりますようにお祈り申し上げます。熊野信仰IIにつづく。

